



根岸 英一

ノーベル化学賞受賞 根岸 英一 名誉博士が岡山大来訪!!

特別企画

「岡山大プロジェクトにエール すばらしい研究に」

日本中を沸かせた米バドュー大の根岸英一特別教授のノーベル化学賞受賞決定からおおよそ5カ月。一躍、時の人となった根岸氏が3月下旬、受賞後初めて岡山大学を訪れた。

根岸氏が外部評価委員を務める岡山大学のプロジェクト「エネルギー環境新素材拠点」の会議に合わせて来岡。受賞決定前から決まっていたもので、3月22日、24日までの3日間、岡山に滞在した。

23日には特別講演会「夢を持ち続けよう」を開催。根岸氏の話に、教職員や学生、一般市民ら約1000人が耳を傾けた。講演会に先立ち、岡山大学は根岸氏に、大学第1号となる「名誉博士」の称号を授与。教育研究への貢献に対し、

感謝の意を伝えた。

24日は理学部であった新素材拠点の研究戦略検討会議に研究アドバイザーを務める斎藤重治・名城大学総合研究所教授、榎山為次郎・中央大学研究開発機構教授とともに出席。参加する自然科学研究科教授の13人による研究計画や成果についてのプレゼンテーションを熱心に聞き入り、取り組みの課題や今後の見通しなど、一人一人に質問を投げかけた。

根岸氏は会議の中で、「本当にすばらしい研究ばかり」と評価した上で、自身が有機物の合成に関し、心掛けているという「Yield（収率）」「Efficiency（効率）」「Selectivity（選択性）」を表す「YES」という方法論を紹介。「YES」という

考え方を言えば、それぞれの研究が一段とすばらしいものになる」とアドバイスした。

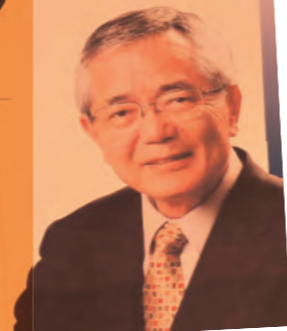
新素材拠点のメンバーで、学生時代から根岸氏と交流のある同研究科の西原康師教授は「会議を通じて根岸先生の研究に対する真摯な姿勢を改めて感じる事ができた。根岸先生もエネルギーや環境問題を解決する次世代型の有機化学反応の開発に向けた研究構想を持っており、岡山大学の研究と通じるところがある。根岸先生も岡山大学の研究を全面的に応援するとおっしゃっており、いい成果を出したい」と話している。

岡山大学特別講演会

ノーベル化学賞受賞

根岸 英一

米バドュー大特別教授



夢を持ち続けよう!

2011. 3. 23

特別講演会
要旨

よく、どうしたらノーベル賞を取れるか、その確率はと聞かれる。ノーベル賞は1901年に始まり、受賞者はおよそ1000人。世界の人口で割ると、確率は1000万分の1。これは宝くじの世界だ。

振り返ってみると中学卒業まで、教室以外で勉強したことがなく、きちんと勉強したのは高校時代だけ。

大学時代には体を壊して留年。その時、人生や自分の将来を真剣に考えた。人生の目的とは幸福、幸せだと思う。幸せは100%つかみたい。幸せには四つの要素があって第1は健康。第2は伴侶。去年、金婚式を迎え、身近にいた2組の金婚カップルと一緒に祝った。非常にハッピーなことだと思う。3番目は、自分の一生を楽しめ、追求できる職業を見つけること。それは好きと同時によくできることであること。その分野で100分の1、できれば1000分の1になる努力をしてほしい。四つ目は趣味。私はどこでも歌うほど、音楽好き。ジャンルは幅広くクラシック、中世音楽から歌謡曲、演歌まで何でも。あとはスポーツ全般だ。この幸せの考え方は20歳から一貫して変わらない。

さて、大学卒業後、帝人に入った。そこで上司から高分子の化学反応について研究してほしいと言われた。大学に戻って勉強し直そうと思い、授業料を思案していた時に知ったのが留学制度だった。英会話を猛勉強し、試験に通って1960年、米国に渡った。

留学先はペンシルベニア大学。私の研究の基礎はここ

で習った。勉強した甲斐があり、テストはよくできたが、実験室では失敗ばかり。このころから学者志向が高まり始めた。当時、著名な先生方を追いかけてあちこち出向いた。3年間で、多くのノーベル賞受賞者に会い、ひょっとして自分もと考え出した。

留学を終えていったん、帝人に戻り、3年後に退社。66年に博士研究員としてバドュー大学のH・C・ブラウン先生の研究室の門をたたいた。ブラウン先生の下で2年を過ごし、ニューヨーク州のシラキュース大学に移った。インテリな人が多く、今に見てろという気持ちで研究し、ノーベル賞の基となる仕事のほとんどは、ここでの7年間にやったものだ。

最初はホウ素と銅の組み合わせで反応を始めて、銅をニッケルに変えた。それでもうまくいかず、ホウ素をアルミに変えた。するとアルミとニッケルでポーンとうまくいった。76年のことで、私の人生を変えた新発見。この時、ニッケルでできるならパラジウムやプラチナムでできないかと、試したらパラジウムがうまくいった。これがノーベル賞を取ったパラジウム触媒だ。

(ノーベル賞決定の連絡があった)10月5日はぐっすり寝ている朝方、電話が鳴った。あわてて取ったら、スカンジナビアの方言で受賞を伝えられた。半信半疑だったが、祝辞をくれた審査員の中に友人がいて、その声で本物の連絡だと確信した。その日から睡眠時間が極端に減ったが、今日まで非常に楽しく過ごしている。